コメント

近代合理主義の止揚と宗教の復権

中野　毅

現代は、いわゆる西洋近代の合理主義によって築かれてきた世界であるといえる。そこでは、理性的認識と功利性、進歩と成長が礼賛され、科学技術と産業の発展によって現代人はかつてない物質的豊かさと生活の便利さを獲得した。しかしその反面、現代世界は機械的連帯の世界となりはて、かのマックス・ウェーバーが予言した「精神のない専門人、心情のない享楽人」のうごめく「一種異常な尊大さでもって粉飾された機械的化石化」（梶山・大塚訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』下、岩波文庫、二四六頁）の世界となってしまった。人間と自然、人間と宇宙との生命的一体感をもたらす感情や想像力の活躍するイマージュの世界は、非合理な「魔術の園」であると、切り捨てられてしまったのである。

その結果、臓器移植問題等に象徴される「生命の部品化・商品化」をもたらし、また本来、自分自身もその一部として属する生命体系である環境をも貪り喰らう「環境問題」を引き起こした。個人を国家目的の手段と見なし、同一「種」内のおろかな殺りくである「戦争」もまだ完全になくなったわけではない。

現代人は、しかし、いまやっと自分たちの創り出して

きた世界の欠陥に気づき始めたといえよう。近代化の過程で、無用なもの不用なものとして切り捨ててきた存在、力を再発見し、再生させていく必要が認識されてきた。しかし、その努力は単なる伝統への回帰であってはならない。現代人が経験した「近代」は、簡単に否定できるほど容易なものでもなければ、無意義でもない。

それでは、このような条件を満たし、近代合理主義を超克・止揚し、人間がもっとも人間らしく生きられる世界を再生させるための原理は如何にあるべきか。このような問題意識をもって、今回、東洋哲学研究所では、第六回学術大会の一つのイベントとして、シンポジウム「二十一世紀を考える――人類的課題と宗教」を開催した(一九九〇年四月二十二日)。

まず最初にソルボンヌ大学(パリ第五大学)教授のミッシェル・マフェゾリ氏に「世界の再聖化あるいは合理主義の超克」と題して記念講演をしていただいた。マフェゾリ氏は、一九四四年生まれで、グルノーブル大学、ストラスブール大学を経て、三十四歳の若さでソルボンヌ大学の教授となった気鋭の社会学者であり、「日常性」や「想像力」、「芸術的意思」などを重視する社会学の新しい波を代表する人物である。従来より社会生活の母体として宗教に着目してきた氏は、デュルケムのいわゆる「社会的な神」、または人と人を結びつけていく、その社会を根源で結びつけて調整させていくある宗教性というものの重要性を提唱している。次に各パネラーの報告であるが、宗教の必要性をいうことにおいて同列である。

屋嘉比氏は現代の先端医療のはらむ問題点、例えば脳死・臓器移植にからむ生命倫理の問題を論ずる中で人間の側からの主観、すなわち人間生命をどう尊厳するかという慈悲の立場からの連帯感が医療の現場にあって欲しい、ということからも宗教の必要性を強調している。

一方、八巻氏は、環境と人間の一体性や人体と心というものを不可分なものと見ていく考え方と煩悩や欲望をコントロールする力を持ち、他者のためにという利他の精神が深く内在している宗教の必要性を新しい経済学の視点から述べている。

また平野氏は、ラパポートのいわゆる「制度として戦争を廃絶しなければならない」という視点は重要だが、

あわせてその制度を支える「人間」自身の心を問題にしていかなければならず、平和を求める心というものを人々が共有していかなければならないと言う。それから、そういった人々が集まってシステムを変えていくための行動体というものが必要であり、行動を支え、人間・地域・地球を結びつけていく一つの新しい宗教というものが要請されると訴えている。

そして結局、そういう宗教というのは仏教、なかんずく大乗仏教であるというのが川田洋一氏の基調報告であった。すなわち、大乗仏教というものは、社会に積極的に関わっていく精神というものをもともと持っているものである。それは一つは無我という論理からくるものであり、自己の我というものを止揚した人々の世界、自然も宇宙も含む縁起の世界が仏教的な世界であって、そこから他者をも自分と同じように慈しんでいく慈悲が生れてくる。それを具体的な生き方としたのが菩薩であって、それこそが、今後の歩むべき宗教の担い手の最も望ましい姿だという主張であった。

マフェゾリ氏は、この仏教について「現在を大事にして、未来に向かっている」と評価している。氏によればフランス語のエランヴィタル(生命の躍動)とプレゾンタリズム(存在主義)を仏教は持っており、特に、法華経の中にそれを強く感ずるという。また氏は討論の中で「いわゆる経済というのは未来を指向しており、エコロジーというのは現在を指向している。経済というのは皆さんが使っているところの生命力であると思う」と言っているが、これなども、経済と環境の調和を目指す、新しい経済哲学へのヒントとなるかもしれない。

また一方、マフェゾリ氏は、医学の分野においても「生命力との間に均衡のとれた生命倫理というものがあるのではないか」として、セネステジーを例にとり均衡の論理を提唱している。その他、内在と超越、物質と精神の問題、宗教性喚発の契機、生命の内容としての変革等々、各パネラーとの熱のこもったディスカッションは延々三時間にも及び、極めて意義のあるシンポジウムを行うことができた。マフェゾリ教授をはじめとして、参加された各パネラーと聴衆の方々に改めて感謝の意を表する次第である。

(なかの　つよし・創価大学助教授)